

弥生時代の青銅器

—岡山市内出土の銅鐸を中心に—

安 川 満

【講座の概要】

1. 弥生の青銅器

舶載鏡、倭鏡のイメージもあり、国産の青銅器については非常に稚拙なイメージをもっている方も多いと思いますが、弥生時代から非常に高度な青銅器鑄造技術をもっていました。弥生時代には国内で銅剣、銅矛、銅戈、銅鏃などの武器、銅鐸、銅鏡などが生産されます。最近では兵庫県南あわじ市の松帆銅鐸の発見、岡山県では総社市神明遺跡の銅鐸の出土など大きな話題になりました。ここでは銅鐸を中心に鑄造方法や型式分類など基礎的なことから岡山市内出土の銅鐸の特徴についてみていきたいと思います。

2. 銅鐸の鑄造と変化

銅鐸は鈕の形態を中心に、菱環鈕式→外縁付鈕式→扁平鈕式→突線鈕式に分類されています。これは鈕がつるすという機能から大きな文様帯へという、いわゆる「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」への変化を反映しています。銅鐸は溶かした青銅を型に流し込んで作る「鑄造」という方法で造られますが、型には石製、土製があります。扁平鈕式の途中で石製から土製に代わりますが、これによりさらに大きな銅鐸の鑄造が可能になりました。一方、石型には同じ鑄型で作られた同汜鐸（兄弟鐸）が存在することがあります。鑄型を補修しながら何度も使用しました。鑄型は畿内を中心に播磨、尾張、北部九州から出土していますが、残念ながら県内からは出土していません。

3. 岡山市内出土の銅鐸

岡山市内からは伝承や残っていないものも含め、13 例以上の銅鐸が知られています。文様は伝足守鐸、百枝月の銅鐸片が横帯文、高塚 1 号鐸が流水紋である以外は袈裟襷文です。姫路市今宿丁田遺跡、名古山遺跡で扁平鈕鵜古段階の四区袈裟襷紋銅鐸とみられる石製鑄型片が出土しており、播磨で鑄造されたものかもしれません。伝足守鐸は福田型と呼ばれる鐸面に邪視紋を表現したもので、九州産と考えられています。

最も古いものは百枝月採集の銅鐸片で外縁付鈕 1 式、最も新しいものは高塚 1 号鐸で突線鈕 2 式のもので、全国の銅鐸出土数では突線鈕 3 式以降のものが約 1 2 0 例と全体の 2 5 パーセントを占めていますが、市内、吉備では出土していません。高塚 1 号鐸は後期初頭の土器が伴出しており、この時期に吉備の銅鐸祭祀が終焉したものと思われる。

【主な参考文献】

難波洋三 1986 「銅鐸」『弥生文化の研究』6- 道具と技術Ⅱ - 雄山閣
中野倫太郎 1992 「銅鐸」『吉備の考古学的研究』（上） 山陽新聞社

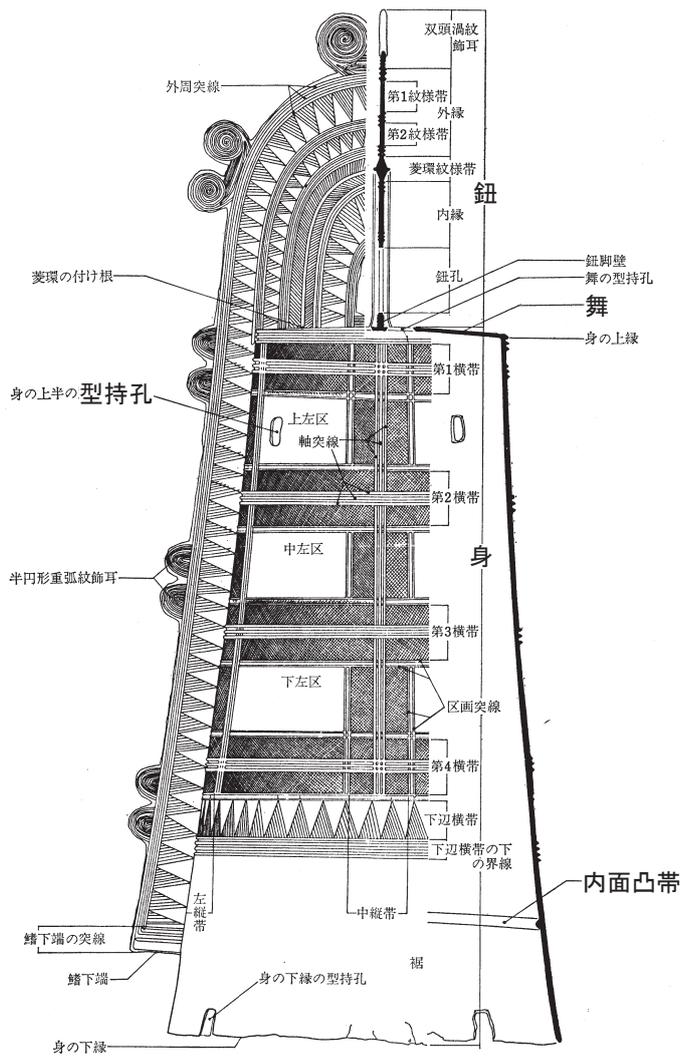


図1 銅鐸各部の呼称

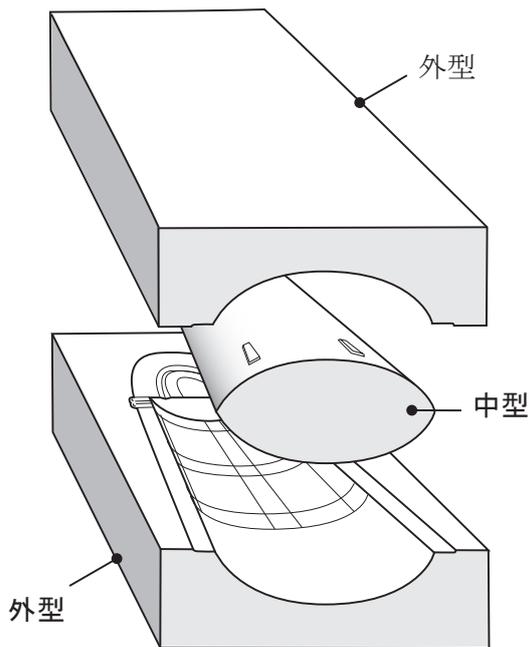


図3 石製鑄型の模式図

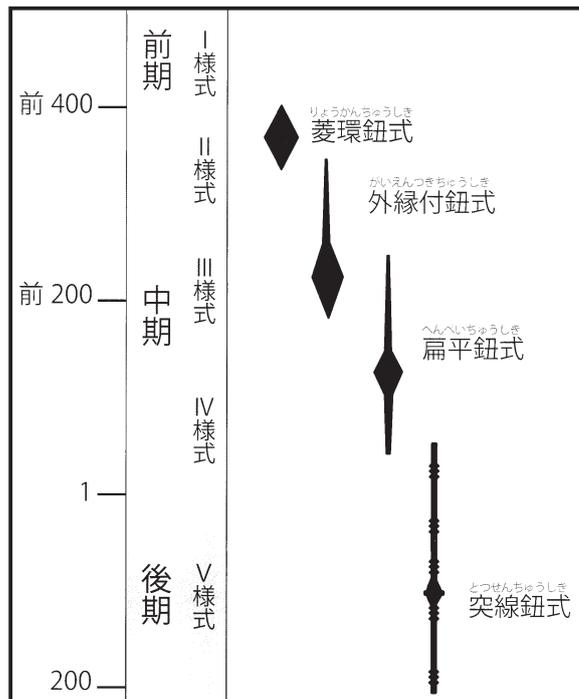


図2 銅鐸の分類と変遷



図4 大阪府東奈良遺跡の石製鑄型

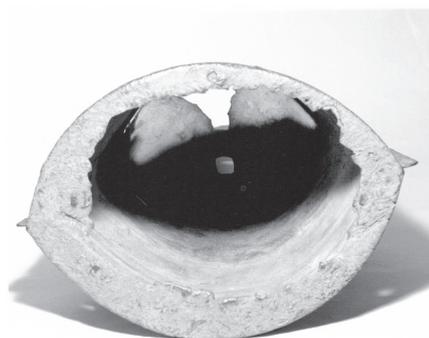
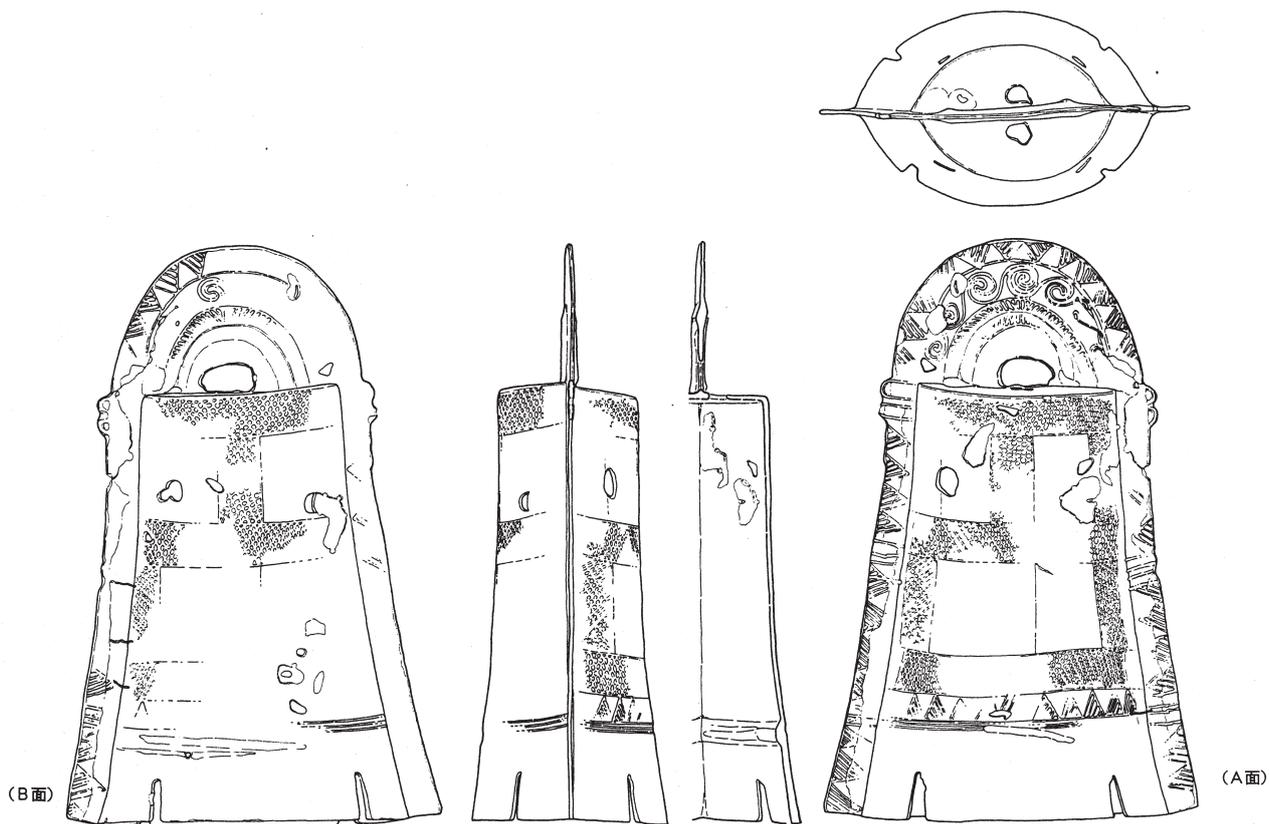


図5 辰馬 434号鐸



- ① 鋸齒紋、斜格子紋が消えている
- ② 鱗 - 鐸身境界に低い段
- ③ 鱗の鋸齒紋、飾り耳の足を書き足し
- ④ 鑄型のヒビ

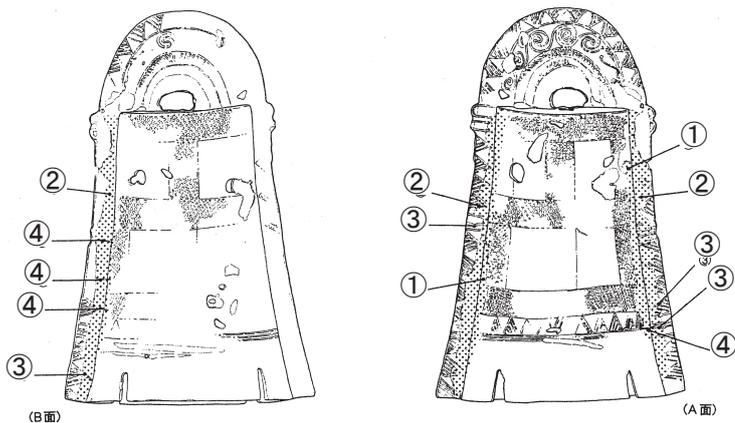


図6 安仁神社銅鐸 (1/4) と鑄型の補修痕

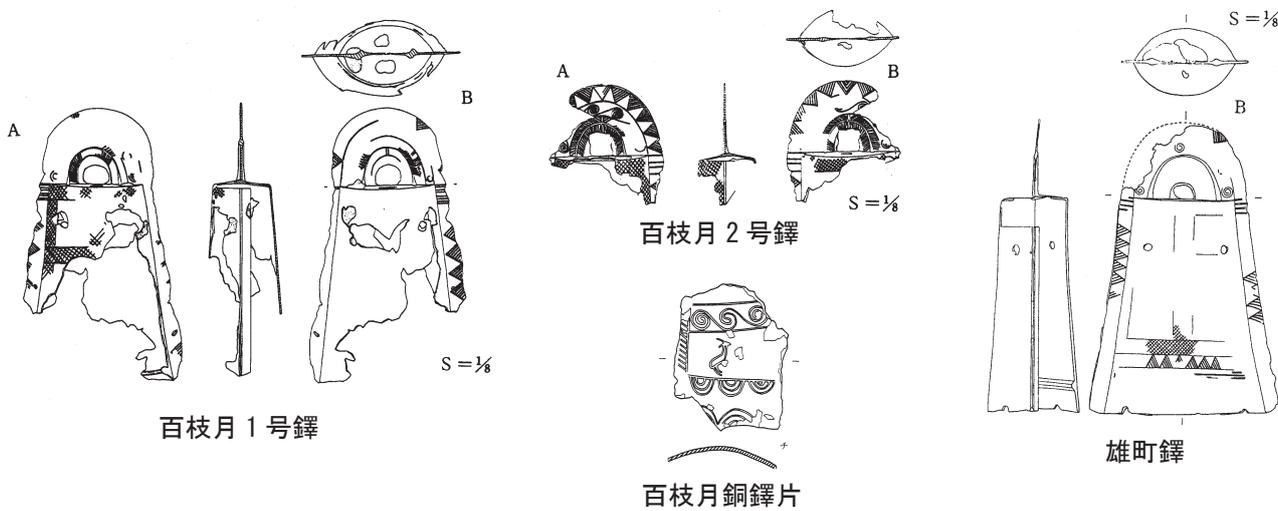
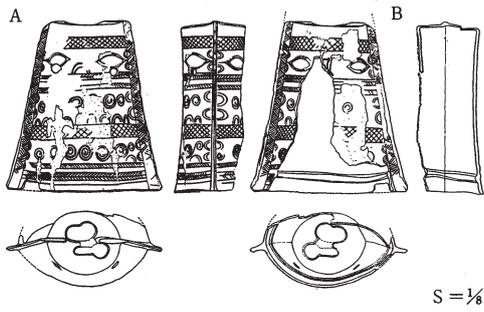
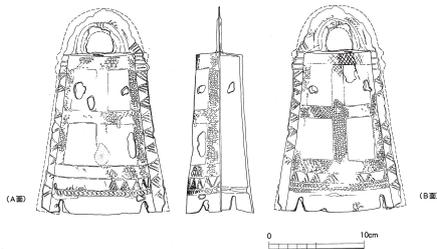


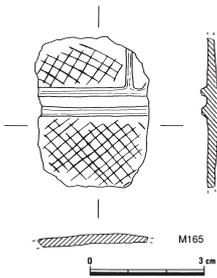
図7 市内出土の銅鐸 (1)



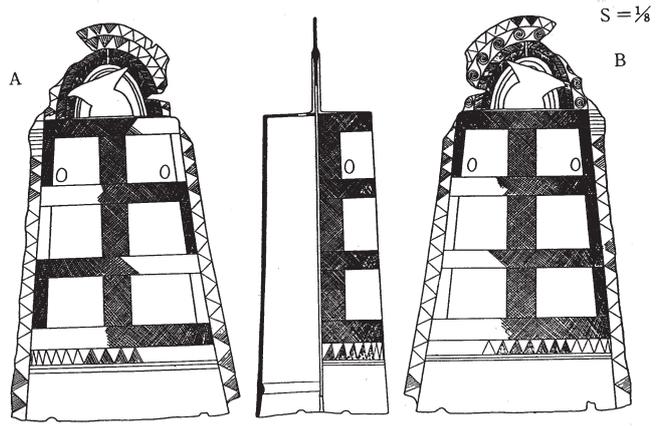
伝足守鐸



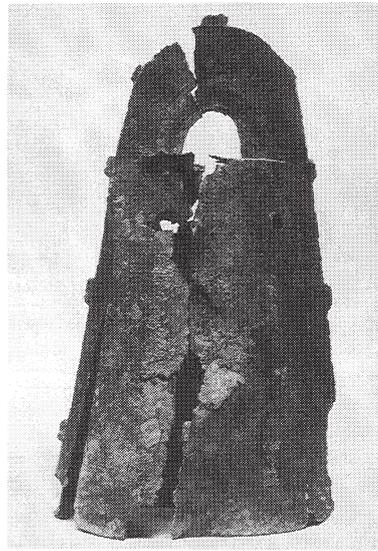
片岡家鐸



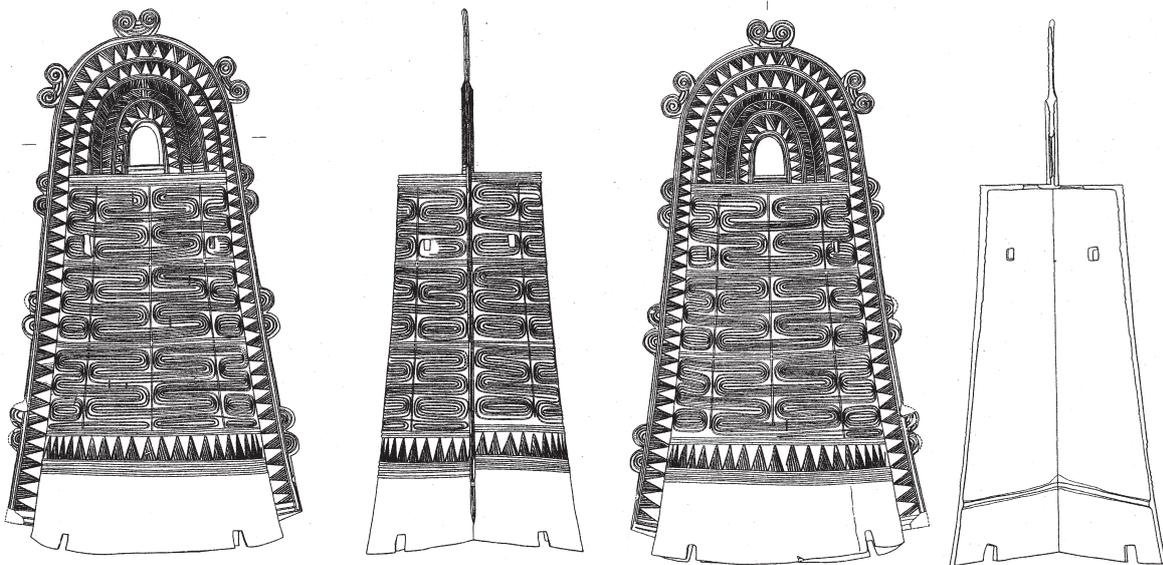
高塚2号鐸



兼基鳥坂山鐸



大廻山鐸



高塚1号鐸

図8 市内出土の銅鐸(2)